

## 学長&総長 対談

# 語りましょうか、 箱根駅伝のことや ぼくらの学生のころを。

学長 角田邦重 × 総長 外間 寛

Sumida Kunishige

Hokama Hiroshi

構成＝編集室十学生記者・谷ちひろ(法学部2年)

### はじまりの箱根駅伝

——箱根駅伝の1月2日と3日、理事長、学長、総長は大手町に勢揃いされましたね。新年あいさつ(1月5日)でもみなさんが枕言葉のように「箱根駅伝」の話から始められる。大学のことを語るうえで欠かせない、「象徴としての箱根駅伝」

——そんな感じも抱きました。

外間寛総長 私は93年から99年まで学長をやっています、毎年、正月は大手町に行つて応援しました。そのときも、やはり内海(英男)理事長、高木(友之助)総長がおみえになってご一緒でした。昨年総長になりましたので、ことは99年いらいですね。

角田邦重学長 先生の学長るときに1回優勝しませんでしたか。

外間 あれはね、帰ってくるの(ゴール)を見てないのです。

角田 99年、平成8年だと思います。大学スポーツの中で、いかにも象徴的な、みんながフィーバーするのが箱根駅伝ですね。学長になって卒業生である学員会の地方支部を回ると、そこでも箱根駅伝で盛り上がる

(笑)。法学部の先生が『ジュリスト』などに書いている専門の論文は読んでも分からないが、箱根駅伝で母校の選手が頑張っていると、おれの大学なんだと一番身近に感じる、とおっしゃるんです。母校愛は情緒的、感情的なものでもありますから、箱根駅伝が一番強烈な印象を与えるのでしようね。

外間 スタート地点の読売新聞社前には、教職員や学員の方だけではなく父母連絡会の方々もたくさん来てくださる。私が学長るときには、長野の元父母連会長さんが「必勝」の文字の出たリングを届けてくださったり。

角田 池田行夫さんですよ。必勝リングはいまも続いているんですよ。

外間 そうですか。学員で総務省官僚の方も毎年お見えになるんです。去年沖繩に赴任されたとかで、今年は沖繩からわざわざ出てきて応援に来てくださった。

——半面で、在学生の姿があまり見当たらない。教職員や学員の「熱さ」に比して、学生は冷めているのかな、そんな感じもしますが。



### ほかま・ひろし

1932年、沖縄生まれ。54年中央大学法学部卒。東京大学大学院博士課程退学。68年中央大学教授に。同法学部長、学長（93年-99年）、大学基準協会専務理事を歴任して、昨年11月総長に就任した。

**角田** テレビで見ているんじゃないんですか。インターネットやテレビの生活に慣れているから、その場に応援に行く学生は少ない。でも見ていると思いますよ、みんな（笑）。

96年の優勝のとき、僕はテレビで見えずごく印象に残っているんです。特に8区を走った川波貴臣選手のことか。

**外間** ああ、文学部のね。



### すみだ・くにしげ

1941年、熊本県生まれ。65年中央大学法学部卒。同法学部助手、助教授をへて78年教授に。91年-95年法学部長、2002年から学長。大学基準協会理事、日独労働法協会会長。

**角田** ええ、長髪ですよ、ネットクスですよ。もう最初から無謀なぐらい飛ばして、潰れるんじゃないかと言われながら最後まで押し切って、ぶつちぎりの優勝の立役者になった。

**外間** そうそう。

**角田** 法学部長のあと持った国際企業関係法学科の1、2年生ゼミで、マラソン志望の学生がいました。聞くと、川波君に憧れて中大に入学した、

というのです。体育会系といえは上。下の規律が厳しいのに、中大のマラソンは、長髪にネックレス、あいう自由な雰囲気があるのかとびっくりした。他大学からも勧誘されたが、中大に決めました。

伝統と個人の創造力という個性、その2つがうまくマッチングしないと伝統の本当の強さは出てこない。そう思いますね。

——ことしのレースはどうご覧になりましたか。

**角田** 去年は藤原正和君が2区で活躍して、トップになった。5区の出山登りで突然アクシデントが起きて往路は12位（1回も山登りを経験したことがない選手が急ぎで代走したのだから責められない）、復路で挽回して総合5位に食いこんだ。伝統の力だなと思いました。

ところが今年は故障者が誰もいないのに落とすと落ちこちて往路13位、復路で総合7位まで盛り返ししましたけれども。見ていて何となくタスキを渡す、次は抜いてくれるぞ、という躍動感がタスキを渡すところからあまり感じられなかったな。

**外間** 以前は、中心になる、頼り

になる選手がいましたね。川波君もそうだし、中心になる選手がいて、みんなを引っ張るような雰囲気を感じました。今年はそれがなかった。

**角田** みんなの力を出し合えば、去年よりいい成績が期待できる、という前評判でしたからね。しかし、伝統を守らなければならぬという気持ち、しくじったら大変なことになると、選手たちに逆のプレッシャーになったのか。守りの姿勢になっただけじゃないかどうか。

伝統校が持つ強さと同時に脆さ、ですね。そんなことを感じました。

### 留学生と文学青年

——学生時代のころをうかがいたいのですが、外間先生は沖縄出身で、復帰前だから「留学生」だったそうですね。

**外間** ええ留学生なんです。入学したのが1950（昭和25）年。沖縄はアメリカの政権の下にありました。ですから行き来も自由ではなかった。私が高校を卒業するころから留学生制度ができて、試験を受けて、文部省が引き受けてくれるわけです。中央大学に来たのは、文

部省から中央大学に「配属」されたという関係なんです。

角田 配属ですか。

外間 法律関係は私のほかにも5、6人いましたけれども、船で横浜に着くと文部省の人が出迎えて、船の中で君はこの大学、君はあの大学と割り振られた(笑)。

角田 一応法学関係という希望は出してあるわけですか。

外間 そうです。専攻の希望は出しておりす。ですから、私は中央大学の入学試験は受けていないんです。もし受けていたら落っこちていたと思います(笑)。

私は大学に入る前の学校教育も11年しか受けていないんです。入るときには文部省の関係で中央大学は受け入れてくれたのですが、卒業するときに大学当局に呼ばれて「お前の年齢で卒業できるはずがない」って言われたんです。1年足りない、なぜだと。僕は沖繩の事情を説明し、文部省にも確認してもらって、それで何とか卒業を認めてくれたんです。だから1932年の早生まれじゃない学生で、50年卒業は普通はないんです。

角田 僕は61年に入学しています。二部、いわゆる夜間部です。

僕はいなかの高校(佐賀)を卒業して、東京の大学、東京に出てみたいなと思っていたときに、同じ郷里の弁護士が東京にいらして、昼間は事務所を手伝って、夜間部に行ったかどうかといわれたんです。

じつは僕は高校のときには文芸部で小説を書いたりしていたんですよ。

担任の先生が、九大文学部を出て実存主義文学をやっていたらして、一緒に同人雑誌を出さないか、九大の文学部に行ったらどうだと勧められたんです。東京に出たいと思っているときに弁護士からの話があったものから、あっさりとは転向です(笑)。

外間 小説を続けていればノーベル文学賞だった(笑)。

角田 ははは。弁護士事務所に行くようになって、どうせなら大学の法学部に行きなよ、法律なら中央がいいと勧められて、それで中央に入ったんです。入学後も法学部の授業は半分ぐらい、文学部の授業にせつせと通った。当時は名物の先生が沢山いましたからね。フランス文学の田辺貞之介先生とかヘルマン・

ヘッセの高橋健二先生とか。

外間 辰野隆先生もいらした。

角田 そうそう。当時助教だった木田元先生の哲学の授業も聞きに行きました。実存主義哲学とか、そういうのが面白くて、聴講してときどき質問したら、木田先生にうちに遊びにこないかなんて誘われました。

——すっかり文学青年ですね。

角田 2年生の終わりに、将来の進路を考えて、司法試験の受験団体の一つ(星友会)に入ったのですが、そこでもまだサルトルの『嘔吐』とかいろいろ読んでいたの(笑)。あるとき先輩に、お前何読んでいるんだ、ここは司法試験受験団体なんだぞって言われた。その場から古本屋に連れ出されて「この本を読め。1週間で読んでおけ」と。次の週には

「はい、この問題を書いてみる」とそんな感じで、我妻采の『民法講義』などを1週間に1冊読む、そういう指導をもらった。

先輩が後輩をしつかり教えてくれるというのは、中大の伝統ですね。特に受験団体では。星友会の会長が外間先生だった。

外間 いや、僕は知らない(笑)。

この前星友会の集まりがありましたけどね。

角田 思えば、夜間部で勉強している人たちも多かったですね。司法試験の合格者も多かった。

外間 駿河台のときの夜間部は、中央はいい学生をたくさん集めていましたね。

### みんなが苦学生だった

——ともに、苦学生でいらした？

外間 そうそう、苦学生ですよ。

角田 夜間部ですから、私自身も外間 まあ、日本人全体が苦学生の時代でしょう(笑)。確か東京にきた昭和25年のころは食券制度があつて、食券がないと一般の食堂もごはんを食べさせられないんです。市役所にクーポンを貰いに行つたと思いますよ。

私はアルバイトをする必要はなかったのです。留学生の奨学金もらっていましたから。確か月4千円ぐらいだったと思います。それで下宿代とか、たまには本を買うとかそういう生活ができました。角田さんのころは、東京で生活費はどれぐらいでしたか。

**角田** 僕は3年生の夏休み前に、司法試験を本気でめざすために24時間時間が欲しいと思つてバイトを辞めたんです。決断できたのは、1万7000円ぐらいの特別奨学生という制度。それをもらつていました。

**外間** そうですか、僕はほぼ10年前だけど、月4千円で東京で下宿生活。ただ、学校と下宿の間を歩き来するだけです。たまに映画を見ることはありましたけれども。旅行するとか酒飲むとか、そんなことは全然できなかつたですね。

——そのときは勉強一筋。「沖繩」も背負つていらした。

**外間** そうですね。大学の勉強が終つたら、沖繩に帰らなければならぬという事になっていましたから。ただ、大学院に行つて教職に就いたということで、認めてもらつているわけですね。

沖繩の高校では勉強らしい勉強はしてない。入学当初は教室に入つていくのが怖かつたですよ。

よくは知らずに法学会に入つたのですが、司法試験を目指さない人たちが集まる団体だつた。その代わり若い先生方からいろいろ勉強を教

えてもらいました。特に英米法の小堀憲助先生にはご指導いただいた、イギリスの学者のウィーアという人が書いた『現代の憲法』という本をみんなで翻訳しました。伊藤正己先生と小堀先生の共訳という形で勁草書房から出ています。そのはしがきに我々の名前を入れてくださったんです。法学会で勉強した成果の一つです。

### 講和論争、そして60年安保

——ほぼ10年の違いという時、時代状況も違いますね。

**角田** 私が入学したのが、60年安保の翌年です。安保闘争の熱気は佐賀でも体験しています。浅沼稲次郎・社会党委員長が山口二矢に殺された（60年10月）ときには、駅前には遺影を掲げて、地域の人たちの列ができ、抗議のデモなどがありました。上京したときには、内閣も池田（勇人）内閣になつて、所得倍増で高度成長の時代が目に見える形で始まつていた。政治から経済へ転換の時代ですね。働いていた弁護士事務所は銀座にあつたので、近くの日比谷公園で三井三池闘争の集会風景などにも何

度か出合いました。石炭から石油へエネルギー政策転換に対する反対闘争で大変な時代ではあつたのですが、今から考えると経済の右肩上がりの時代でしたので、全体として暗いというイメージはなかつたですね。

オリンピックの64年に、司法試験に受かつた。外はオリンピック、こっちは一生懸命、最後の受験勉強やつてる。そういう感じでした。

**外間** 私の学生時代は戦後まもなくです。やはり沖繩と東京の対比が非常に強烈でした。沖繩は何もなかつたんです。食べるものも服も何もない。勉強もしてなくて、頭も空っぽだ。東京に来て文部省に行つたときに見た、「並木の緑」が忘れられません。5月、ちょうど緑が美しい時期で、その並木の緑が沖繩と東京との違いの強烈な印象として今でも強く残っています。

——サンフランシスコ講和条約が入学翌年の26年9月。議論が沸騰していた時期ですね。

**外間** そう、単独講和か全面講和かという議論で日本全体が沸騰してました。学生の間でも、ずいぶん議論しました。そして講和条約と一緒に

日米安全保障条約が結ばれた。日本は独立したと同時に、アメリカの軍事基地化されてしまったということです。27年には自衛隊の前身になる保安隊の誕生……敗戦から、少しずつ日本全体を巻き込んだ新しい動きが出てくる、そういう時代でしたね。60年安保へつながる、政治的大激動期だつたわけですね。

——顧みて、大学4年間で得たものは何ですか。

**外間** 学問と出合つた喜び……そうですね。例えば『民法総則』は勝本正晃先生でしたが、大変立派な講義で、法律つてこういうものかと、法律の勉強はこういうことをするのかと目をみひらかされました。橋本公巨先生はまだ教えておられなかつたと思いますが、憲法は佐藤功先生です。佐藤先生は政府で憲法草案の作成にかかわられた。

**角田** そうですね。天皇のものまねとか吉田首相のものまねも上手ですね。

**外間** それから、刑事訴訟法は団藤（重光）先生でした。団藤先生は講義に六法しか持つてこないんですよ。ご自分でお作りになつた法律ですか

ら何も見ないで講義できるわけです(笑)。こういう立派な先生方に教えてもらって、感激をしながら、4年間を暮らしました。

来た当初と卒業するときの私は非常に大きく変化しました。

**角田** 18歳からから22歳までの間は、大体何もしなくても成長すると思います。そのときに圧縮した勉強をやるわけですから、やはり変化成長はすごく大きいものがありますね。先生のおっしゃる通りです。それに九州から上京した者から見ると、やはり東京で起きている変化はとても大きい。第一つ抜け出たところからこれからの日本の動きを俯瞰できるように、息吹を感じることができると。東京はそういうところですね。

それから二つ目は、人間的な人とのつながりです。私はたまたま司法試験を受けるについて、合格をしたばかりの人や先輩から個人的なレッスンを受けることができた。これなくして今の自分は考えられないと思います。こういう一生涯にわたって続く出会いの場というのが大きいですね。

## 堅実な中大学生 欲しい冒險心と国際感覚

——今の学生の印象は？

**角田** 我々の時代と比べてどうこう言うのは、年寄りのひがみのようですが、今の学生のほうが高校時代の受験勉強は大変だから入学するとしばらくはみんな息抜きをしたいと思います。そうすると大学では勉強半分、遊ぶことが半分。それは悪いことじゃないかもしれませんが、友達を作ったり、一緒に旅行したり、それからアルバイトもある。いきおい勉強は生活の中の関心の一部であって、他のことに夢中になっているとアツという間に4年間は過ぎる。それはもつたいないなど、そういう感じはあります。

**外間** 確かに、昔のように石にかけりついてもという気迫はあまり感じられませんが、しかし、非常に素直な伸び伸びとした、そういうタイプの学生がたくさんいます。

自分でその気を出せば、そしてちゃんと大学のほうで鍛えるというふうに応じてあげれば、本当に伸びていく。僕は学長のときも定年前ま

でも、非常に気持ちのいい学生にたくさん会うことができて、よかったですと思います。

**角田** 先生のおっしゃる通りに実に伸び伸びとした学生はいます。その通りだと思えます。そして何だかんだいっても中央大学の学生は堅実で、そして将来のことをきちんと考えている。

何か資格を取らなきゃという学生は多いですね。その堅実さは良いことだし、中央大学のカラーでもありますが、少し堅実すぎるのではないかという気もします。たとえば、法学部なら昔だと目標が司法試験だったのが、今だと司法書士か行政書士にしようかなとか、自分の能力からすぐ手が届きそうな資格に向かつて冒險をあまりしない。そういう感じはありますね。

**外間** 勉強も無駄な勉強はしない。角田さんみたいに、直接司法試験に出なくてもサルトルとか、いろいろな本をよく読んでいるとか(笑)、そういう寄り道をしない傾向があるでしょうね。

**角田** 大学の4年間をどう過ごしたかが、4年後にどういうステージ

が待っているかを決めるということを忘れないでもらいたいと思うんです。そこで大学の開放感、学問の面白さを経験してもらいたい。いつまでも受験勉強の続きのような勉強を大学時代に続けたら、それはもつたいないと思う。

**外間** 僕から学生に聞いてもらいたいことは、これからはどんな分野の職業に就いても、いつの間にか国際的なつながりの中に入っていくことになるので、それに備える心構えを持ち、だから英語を一生懸命勉強して欲しい、ということですね。

僕は大学基準協会の仕事を手伝っていて、日本の大学の質の保証、評価の問題だけではなく、国際的な会議で教育について話し合うんですが、どの国の会議に出ている時も、おのずと使われる言葉は英語なんです。どの会議を見ても、みんな通訳なしで英語で行われる。同時通訳がついたのは、東京でやった国際会議だけです。

そういう国際的な交流の面では、日本はまだ少し孤立している状態じゃないかと思えます。これからはどの職業の分野でも多かれ少なかれ

そういう経験をすると思います。だから英語はもう当然のこととして身につけて欲しい。

## 大学が大きく変わる

——大学改革も急ピッチですね。

**角田** これからの大学に期待される役割とか、大学の果たすべき使命が、いま大きく変わってきているんですね。一つは、大学院の充実。質の高い職業に就きたいという人たちの勉強の場が学部だけでは足りない。大学院が重要なんだ。こういう時代に入っています。法科大学院や、アカウンティングスクールなどがそうですね。理工学部はすでに3割を超える人たちが大学院に進んでいるんです。

では、学部では何を勉強するのか。専門の基礎教育です。大学院で次の専門に入るのに対応できるように専門の基礎教育だけは学部のときにちゃんとやらなければならない。中大は実学の伝統を持っていますので、専門基礎教育は学部でしっかりやりたい。

もう一つは、学部の壁を取り払うこと。伝統があるだけに学部の壁も

大きくて、そのために専門の分化や融合ができなかった。しかし学部の壁を越えた授業の作り方をしているかないと、時代の問題にアプローチしていくことができなくなっています。

この面ではすでに始まっているのが、FLPといわれるファカルティ・リンクージ・プログラム。これは、学部を越えた人たちが共通のテーマ（環境問題、国際問題、ジャーナリズム、スポーツ健康科学の4つ）を扱おうというものです。それぞれの学部に分かれている先生方が、共通のテーマで力を出し合い、学生も学部を越えて一緒にゼミで勉強する。学生には一定のまとまった単位を取得させて、その分野を勉強したという証明書を出しています。

理工学部大学院でも副専攻というのを作りました。危機管理とか電子社会におけるセキュリティとか、時代のテーマに合った研究課題を従来の8つの専攻を越えてアプローチしようというものです。このように学部を越えたカリキュラムの組み方をこれからも拡大しようと考えています。

——行政大学院の構想については、

**角田** 現在の学部の上に乗っかっている大学院、法学部の上の法学研究科、経済学部の上の経済学研究科という枠を越えて、行政大学院を作ろうという構想で、今年の6月に文部省に申請をして、来年の4月から始めようとしています。その次には、文理融合の大学院「電子社会システム研究科」。情報という理工系の技術と、セキュリティとか、あるいは電子商取引とか電子政府など文系のもを一緒にした文理融合型の大学院で来年の6月に設置申請したいと思っています。

学部のほうでは、先のFLPに加えて今年の4月から、キャリアデザイン関係の科目を部分的に始めます。これは入学したばかりの学生が、将来自分の進路を定めるにあたって、どういう科目を勉強していなければならぬのか——学生の関心も高いと思います。

**外間** 私は今の学長のお話をお聞きしながら、大変素晴らしいなと心強く思いました。今は高等教育のあり方というのが非常に大きく変化しつつあります。高等教育についての規制緩和が実施され、従来よりも大

学の設置が容易にできるようになった。日本の高等教育市場は非常に競争が厳しくなってきました。また、少子化や生涯教育など、高等教育をめぐる環境は非常に大きく変わってくる。そういう中で、中央大学ならではの特色を鮮明にしていかなければならないですね。

**角田** 中大はしっかりと伝統が根を張っています。その実学の伝統を単に守るのではなくて、21世紀のグローバルな世界において中央大学の存在価値を主張していかなければならない。大学の個性を出すためには、専門的な知のあり方を新しい実学の時代に適応させて、学部と大学院をセットにして考えていかなければならない。

また、中大は既に47万人の卒業生を出していますが、それは一種のヒューマンネットワークです。学生同士、教員と学生、あるいは学生とOBというように、それぞれのヒューマンネットワークの中で勉強し、交流する。卒業した後もまた大学との間に関係を作れるような、そういうものを大事に育てていきたいと思っています。